

〈図書館探訪記〉

モンゴルの図書館探訪

宇治郷 毅

はじめに

私がモンゴルの図書館についてはじめて関心をもったのは、1995年10月国立国会図書館で開催された講演を聞いてからである。講師は、当時モンゴル図書館協会会長で元モンゴル国立中央図書館長のナイダン・ツァガーチ女史で、演題は「モンゴルの書籍と図書館」⁽¹⁾であった。その時会長は、美しい民族服をまとい、自国の豊かな書籍の歴史および各種の図書館の歴史と現状を情熱的に誇りをこめて話されたのがつよく印象に残った。当時の私はモンゴルの図書館についてほとんど何も知らない状態だったので⁽²⁾、この時の体系的で要を得た話に非常に新鮮な感動を覚えたものである。しかしショックを受けた話もあった。それは1990年以後の急激な社会体制の変化、特に市場経済の導入により、図書館の経営が困難に直面し、いくつかの図書館が経営難で閉鎖されたという話であった。そしてモンゴルの図書館の将来のために次の7つの課題への早急な取り組みの必要性を強調されていた。それは、①近代的コンピュータ導入が遅れているため情報および目録の電算化が遅れていること、②資金難により資料の保存・修復に問題があり、特に方法・技術面の立ち遅れがあること③図書館学の面で学術研究が遅れていること、④専門職組織の活動の活発化のさらなる必要、⑤モンゴル書誌学の発展のための体制の確立、⑥モンゴル国立中央図書館におけるアジア、太平洋、ラテンアメリカの資料群の充実、⑦市場経済化に適応した新たな図書館体制・情報システムの構築の必要であった。

その後、モンゴルの図書館はどうなったのであろうか。長い間気になっていたが、モンゴルの図書館についてはこの間情報がきわめて乏しかった。日

本では、モンゴルの図書館についての研究論文といったものはあまり見当たらないし、見学記が数点見られる程度であった⁽³⁾。このような状況であったが、2008年第16回「アジア・オセアニア地域国立図書館長会議」(CDNLAO)が国立国会図書館で開催され、モンゴル国立国会図書館の現館長であるハタギン・ゴトヴィン・アキム氏の「モンゴル国立図書館における図書館のデジタル化」という発表があり、モンゴルの国立図書館の電子化の現状についてはかなり詳しいことがわかった⁽⁴⁾。15年前のナイダン・ツァガーチ会長の提起した課題のいくつかは解決に向かいつつあることもわかった。私は自分の目でモンゴルの図書館を見学したい思いが強くなった。

幸いその機会が昨年(2009年)8月にめぐってきた。それは私が近年行っている東北アジア図書館調査の一環として、8月19日から24日までの日程でモンゴルを訪れることができたからである。ただし今回は短期間である上に、教育文化学科の同僚教員である国生寿教授と同行することになり、国生教授の専門である生涯学習論も考慮して博物館、美術館も加えたので、首都のウランバートルの社会教育機関見学といった性格のものになった。日本の公民館にあたるものがあればそれも見学したかったが、まだないようであった。

今回の見学では、2009年3月まで留学生として本学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程前期を修了し帰国していたモンゴル人のマインバイル・テムーレイさんと彼女の両親にはたいへんお世話になった。テムーレイさんには次に紹介する首都の3つの図書館の見学先のアレンジと案内をしてもらった。お父さんのS. Mainbayar氏は、現在のモンゴル民主化運動を先導しつつある民間団体の「モンゴル民主化連盟」(MDU)にお勤めで、「国立民族歴史博物館」の展示室の民主化以後の部分を構成・制作されたとのことであった。またご自身が共著者の一人として執筆された『Consize Album of the MDU Hisory』(2008年刊)をいただいた。この本は写真が豊富で1980年後半以後から現在までのモンゴル民主化運動の苦難の歴史が非常によくわかる貴重な資料であった。

現在のモンゴルには約300の公共図書館、約700の大学・学校図書館、約500の専門図書館があるという。今回、我々が見学した図書館は3館に過ぎず、とうてい現在のモンゴルの図書館事情を明らかにできるものではない。地方

にも足を伸ばせなかったのも残念であった。しかし見学した首都の以下の3館の館長さんをはじめ案内してくれた職員の皆さんすべてが情熱をもってモンゴル図書館の発展のために日々努力されている姿を垣間見ることができた。現在のモンゴルは民主主義社会制度の確立を目指しつつも、既存の社会主義システムから市場経済化への転換がまだ十分に軌道にのっておらず政治的、経済的に多くの困難な問題に直面している。図書館の現代化においても同じ問題に直面しており、今回その一端に接することができたのは、今後モンゴルの図書館と交流を深めていく上に貴重な経験になった。短時間の見学とインタビューであったが、国は違っても同じ図書館の発展のために努力している図書館人同士として共感をもつことができたのも嬉しいことであった。

我々が今回見学した機関は以下のとおりであった。

博物館・美術館：「国立民族歴史博物館」「国立自然史博物館」「ボグドハーン宮殿博物館」「モンゴル軍事博物館」「ジュエコフ博物館」「ザナバザル美術館」

図書館：「モンゴル国立図書館」「ウランバートル市公共図書館」「子どもの本宮殿」

その他：「ガンダン寺」「ザイサン・トルゴイ」「日本人死亡者慰霊碑・博物館」「チンギスハーン像展望台」「13世紀ジンギスハーン村」

1. モンゴル国立図書館 (NLM)

8月20日午前モンゴル国立図書館を訪問した。市内中心のスフバートル広場の南すぐのところにあった。重厚な建物の玄関を入り、閲覧室入口に向かう。そこにガラスのショウケースに入った石のモニュメントが迎えてくれた。1924年にモンゴル大蔵教がこの図書館に所蔵されることになったことを記念して作られたものだという。これは仏教に対するというよりモンゴルを代表する貴重な典籍への敬愛を表明したものとうけとれた。館長秘書のD. サランチメグさんが出迎えてくれ、まずはハタギン・ゴトヴィン・アキム (Hatagin Go. AKIM) 館長とD. ビヤンバスレン (D. BYAMBASUREN) 副館長を表敬した。館長からは1時間ほど当館の現状と課題について話をう

かがうことができた。表敬後1時間ほど館内を見学した。すべての閲覧室と貴重書展示室（博物館）および書庫を見学した。建物は50年以上経ち、老朽化がめだつたし、蔵書の増大にともないすでに狭あいになっているとのことであった。また施設も今は旧式化しているが、現在市内の他の場所に新館を建築計画中とのことで、完成すれば最先端のものになるだろうとのことだった。

館長よりこの図書館の刊行物である小冊子『NATIONAL LIBRARY OF MONGOLIA』(2006年)と『Museum Rare and Valuable Books at the National Library of Mongolia』をいただいた。これらの資料とウェブ (<http://www.nationallibrary.mn>) 情報及び館長の説明を参考に、この図書館の歴史と民主化と市場経済化に直面しているこの図書館の現状についてのべてみたい。



モンゴル国立図書館 正面



館長室にて
右より国生教授、アキム館長、筆者



階段（3階より）



一般閲覧室



新刊コーナー

（１）歴史

モンゴルの国立図書館の淵源は、社会主義国家時代に入った直後の1921年11月、典籍委員会（現モンゴル科学アカデミー）に置かれた図書室にある。最後の国王である活仏ボグドハーンが死去し、1924年11月その貴重な資料が国家図書館に移管され、名称も国立図書館となった。1935年3部納本制の権利を得た。1951年現在の建物（地上3階、地下1階）に移った（この建物は、第二次世界大戦で捕虜になった日本人によって建てられた）。1952年に5部納本の権利を得た。1957年初めて子ども閲覧室が置かれた。1968年国連の寄託図書館となった。1975年初めて全国の図書館員向け雑誌『図書館員』を刊行した。1988年「中央文化宮殿」に5つの特別書庫、閲覧室、図書修復室を置いた。1990年民主化運動により、名称を「国立公共図書館」から「国立中央図書館」に変更した。1991年IFLA（国際図書館連盟）の会員になった。1994年文化省管轄の独立機関となった。同年大統領令により書誌のデジタル化と図書館サービスの機械化に転換した。1995年すべての貴重書を2階の「貴重書博物館」に移し、一括保管の体制をとった。1996年磁気IDを図書館活動に取り入れ、目録の電子化を開始した。1999年よりジョイント・プロジェクト方式で外国から図書寄贈を受けて国内の図書館に配布し、図書館員のための研修センター機能をもった。2004年国立図書館として図書と文化遺産の保存・修復に義務をもち、全国の図書館への専門的運営、方法の勧告や図書の統一したデータベース作成の情報及び質の良い図書館サービス提供情報を与えることが義務化された。2005年アメリカの「Asian Classics Input

Project」の支援によりチベット語資料の電子目録化作業が開始した。同年、トルコ国際協力事業団の支援で「Ataturk 閲覧室」を開室した。同年、大統領布告で、国民に国の文化財および知的財産を増大させるために出版物の3部寄贈をよびかけた。2006年インド政府とモンゴル政府の合意により、モンゴル大蔵経の電子化が開始された。

(2) 現況

モンゴル国立図書館は、80人の職員で、蔵書、各種サービスおよび図書館の専門技術と情報をもって全国民と全国21県の1500の図書館に奉仕している。約300万冊の蔵書があり、言語別ではモンゴル語、チベット語、サンスクリット語、満州語、ロシア語、英語、ドイツ語、フランス語、ヒンディー語、スペイン語、日本語その他言語の図書がある。年間約7000冊の出版物を寄贈、交換、購入により国内外から収集している。海外50ヶ国の約100の図書館と研究機関と資料交換、専門家の交換、司書研修、共同書誌作成などで協力関係にある。文化財としての文献の保存・修復の国内の中心センターでもある。業務は4部門に分担されている。第1は、情報・技術研究部門である。ここでは全国の図書館に専門的、技術的勧告を与え、司書の訓練をし、司書に能力開発のための種々の資料を提供している。勧告は年に40～50館に出されている。第2は、収集、整理、交換部門である。図書、逐次刊行物などの他、地図、マニユスクリプト（写本）、家系譜、巻物、マイクロ資料の収集に力を入れている。第3は、蔵書保管部門である。蔵書は8つの部門に分類され、それぞれの書庫に収めている。モンゴル研究及びマニユスクリプト書庫、モンゴル語書庫（約16万冊）、アジア言語書庫（約10万冊）、逐次刊行物書庫（約20万点）、西洋文献書庫（約60万冊）、チベット語文献書庫（約100万冊）。第4は、閲覧サービス部門である。全部で6閲覧室があり、全部で350席ある。閲覧者は磁気IDカードを購入して利用できる。年間6万人の閲覧者に20万冊が提供され、書誌情報についてのレファレンスが行われている。

見学で一番見ごたえがあったのは、貴重書博物館であった。典籍の大部分は嚴重に布に包まれて整然と保管されていたが一部展示ケースに収められ見ることができた。

(3) 館長インタビューと見学を終えて

館長がもっとも力説されたのは、資料の電子化であった。この10年間にモンゴル語資料とキリル文字資料の目録の電子化は完成し、チベット語資料の目録の電子化は継続中なので、次はモンゴル語資料とチベット語資料そのものの電子化に力を入れたいということであった。幸いインド政府とのプロジェクトでモンゴル大蔵経の電子化は完成し、現在はアメリカとのプロジェクトでチベット文献の電子化を推進中とのことだった。今後自前でやる時の財政的措置が大きな課題であると懸念をしめされた。また現在国の財政難で図書購入予算が逼迫しているという大きな問題があるが、できるだけ寄贈と交換によって蔵書を確保していきたいとのことだった。CD、DVDなど電子資料は収集しているが十分な閲覧機器がないのも問題となっている。今後の課題は、十分な図書館予算の確保と国内各種図書館とのネットワークの構築である。さらに国内出版物の網羅的収集のためには、納本制度の確立をはじめ法的措置を講ずる必要と、国として出版流通の整備を期待したいとのことだった。

インタビューを終えて一番印象的であったのは、厳しい財政難の中にありながらも、モンゴル国立図書館の現代化にかける館長の前向きで情熱的姿勢であった。また言葉の端ばしに図書館に関心の薄い行政当局への厳しい批判となって時々現われたが、それもモンゴルの図書館を愛し、発展を願う館長の切実な思いから出てきた言葉だと思えた。

2. 子どもの本の宮殿 (BPC)

8月20日午後に訪問した。国立図書館からスフバートル広場や政府宮殿を見学しながら歩いて30分ほどかかった。途中2008年6月に起こった暴動で焼き打ちにあった人民革命党の建物がそのまま残っているのを見た。経済だけでなく政治的にもまだまだ不安定なこの国の一面を見る思いだった。図書館の建物は、スフバートル通り3丁目の文化中央宮殿1階にあった。まずオユンビレグ・ダムディンスレン (OYUNBILEG Damdinsuren) 館長を表敬した。1時間ほど話をうかがった後、館内見学をした。いただいた『The

Book Palace for Children』(同館発行、2006)、〈ホームページ〉<http://www.bpc.mn> を参考にしながら、館長とのインタビューをもとにこの図書館の歴史、現況、課題などをまとめてみた。



子どもの本の宮殿 正面



館長室にて (中央がオユンビレグ館長)



日本語閲覧室



モンゴルの児童書閲覧室
(職員より説明を受ける)



一般閲覧室 (モンゴル語)



目録室

(1) 歴史

1957年にモンゴル国立中央図書館の中に開設された児童室が始まりなので、もう50年の歴史がある。1989～2003年間は、モンゴル国立図書館の分館という位置づけであった。2003年5月9日にモンゴル政府の「2000－2004政策プログラム」により独立機関とすることに決定し、名称も「子どもの本の宮殿」(BOOK PALACE FOR CHILDREN)となり、同年8月に開館した。現在は、2004年9月15日にモンゴル政府によって出された196のディグリーに基づき独立の政府予算機関として独自の活動を展開しつつある。

(2) 現況

「子どもの本の宮殿」は、現在のモンゴルで独立した建物をもつ児童図書館としては唯一のものである。現在の敷地、建物は賃貸であり高額なので自前の建物の必要を所管の文部省に要求しているところである。職員は31人である。蔵書は12万冊を超えた。4割が児童書である。モンゴル語以外では、ロシア語文献がもっとも多い。視聴覚資料もある。座席は、300席ある。利用者の多い冬期は、1日350～400人の利用がある。夏場は利用が少なく1日10人程度である。

閲覧室は、モンゴル語資料を中心とした三つの閲覧室と外国資料を中心とした国別閲覧室がある。広さはすべてで2300平方メートルに達する。

モンゴル語資料閲覧室には、次の三つがある。

- ①知識深い人 (Big knowledge-man) 閲覧室：この閲覧室は、先進国の経験を取りいれて、「開かれた社会のためのモンゴル基金 (Soros Foundation)」がスポンサーになって開室した。幼児や低学年の児童を主に対象とした各種の資料がある。
- ②夢 (Dream) 閲覧室：この閲覧室は高学年のために設けられたもので、10才から16才の中等学校生を対象としている。全部で30席がある。本、新聞、逐次刊行物が利用できる。この閲覧室では、自由閲覧室かまたは個人とグループ閲覧室が利用できる。
- ③教育と発展 (Education and Development) 閲覧室：この閲覧室は、ア

ジア開発銀行の「教育発展プログラム」に基づき財政支援を受けて開室した。このプログラムで、図書館オートメーション・イントラネットと装備された「インターネット閲覧室」を運用している。全部で100席あり、主に大学生など高等学校生を対象としている。インターネット閲覧室は16席あり、インターネットに接続された5台のコンピュータと電子化された目録検索用の5台のコンピュータがある。

国別閲覧室として、ドイツ語、英語、日本語、韓国語、ロシア語の部屋がある。各室には、それぞれの言語を含めレファレンスに対応できる専門職員を配置している。

「ドイツ語閲覧室」は、ドイツ政府とモンゴルの政府協定に基づき「ハインリッヒ・ボエル基金 (Heinrich Boell Foundation)」と「ゲーテ・インスティテュート (Goethe-Institut)」によって設けられた。閲覧室は、ドイツ語文献に関する最新の情報を読者に提供する現代的な技術と装備を備えている。20席ある。

「英語閲覧室」は、教育支援と情報のために活動している「Soros 基金」の協力のもとで運営されている。そこには、この国の子ども、青少年が英語に習熟するための可能なすべての設備が備わっている。この閲覧室の資料では、特に TOFEL、GRE、GMAT、SAT、LSAT、TOEIC などの外国学生の入学試験に備えた英語の本、非図書が充実している。これは、外国の大学へ留学するために勉強するモンゴルの青年、学生をサポートするためである。この部屋には、40席ある。

「日本語閲覧室」は日本の「モンゴル文化基金」の支援を受けて1999年にできた。約3万冊の図書と20席がある。

現在モンゴルでは10大学に日本語学科がある。日本への関心が高く、日本留学を希望する青年も多く、日本語閲覧室には、日本語の各種の図書と教科書があり、よく利用されている。読み聞かせや人形劇などもやっている。貸出もしている。個人の利用者やグループの利用も多い。

「韓国語閲覧室」は、「韓国文化情報センター」の支援を受けて運営されている。10席ある。

この図書館では、日常の図書館サービス以外に、多くの種類の公的活動やイベントを組織し行っている。各種文化的行事や作家と読者の出会いの場、特別テーマの集会、図書館司書の研修、セミナー、ワークショップなどである。

現在この図書館は、国内外の多くの機関の支援を受けて運営されている。特に強い協力関係にある外部機関は、ゲーテ・インスティテュート、ドイツ領事館、ロシア大使館、ソロス財団、モンゴルアジア基金などである。

(3) 館長インタビューと見学を終えて

館長は当面の大きな課題は次の三つにあると指摘された。

第一の課題は自前の建物をもつことである。現在は予算が少ない上に建物のテナント料が図書館予算を圧迫している。この点館長はことあるごとに政府、監督官庁に陳情しているとのことであった。すべての仕事に積極的な館長は新しい建物で新しいサービスを構想しているようであった。

次に利用者の多様な新しい要望に応えていくことである。現在利用者のもっとも大きな要望は、新しい図書への要望である。現在の国情では出版情報を完全に把握するのは難しいので、できるだけアンテナをはりめぐらせて収集に努力している。収集の大部分は寄贈にたよっているが、購入予算の増大が切実に望まれる。

第三は司書の養成である。現在の職員は司書資格をもっていないので専門的な訓練が必要である（職員は、モンゴル文化大学の卒業生が多い）。資格制度の確立も必要である。この国では図書館情報学は遅れているので、その発展も課題である。

館長の話の中でしばしば「子どもはモンゴルの未来」、「現在ものは不足しているが、希望がある」といった意味の発言があったのが印象深かった。

3. ナツアグドルジ記念ウランバートル市公共図書館（UPL）

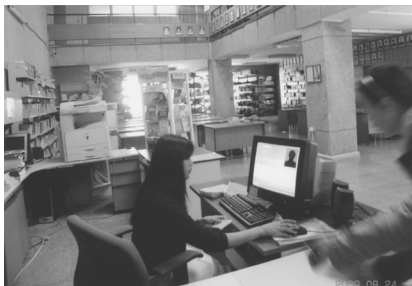
8月24日午後に訪問した。あいにく館長は不在であったので早速職員に案内してもらった。まず玄関に入って驚いたのは、ロビーの一角に文房具や雑貨などの店が開店していたことであった。聞くと経営上の自助努力として場所貸しをしているとのことだった。これは見学中、2、3の部屋が民間の団体に賃貸されているのを見たが同じ理由であった。モンゴル図書館界の厳しい現実の一端を見る思いだった。

ロビーの中央に近代モンゴル文学の祖と仰がれるナツアグドルジ・ダシドルジンの彫像があった。詩、散文、戯曲など多方面にわたり多彩な作品を残しモンゴル民族の心のよりどころになっているこの文学者の名前がこの図書館に冠されるようになったのは1986年のことである。文化の中心である図書館に国を代表する文学者の名前が付けられたことは、この国の精神の方向を示していると思えた。それまで民族的なものが排除されてきたモンゴルでこの詩人や民族の英雄であるチンギスハーンが公に登場してくるのはこの時期以降である。

この図書館のサイト「<http://www.acic.edu.mn>」と案内パンフレット「**ULAANBAATAR CITY PUBLIC LIBRARY**」（2009）と見学時の話によって以下簡単な紹介をこころみる。



ウランバートル市公共図書館 ロビー
（ナツアグドルジの彫刻像（後方）と新刊案内（左））



入館受付カウンター



一般閲覧室



アメリカ文化情報センター



児童室

(1) 歴史

現在ウランバートル市公共図書館（ULAANBAATAR CITY PUBLIC LIBRARY）は中央図書館と4ブランチ図書館（分館）から成る。この図書館の淵源は、1946年に設立された公共図書館にさかのぼり、最初は約3千冊の蔵書、20席、一人の職員をもって出発した。1980年に市立中央図書館の現建物が設立された。1986年の時点では3つのブランチ図書館があり別個に活動していたが、組織上中央図書館に統合された。1992年市場経済システムに移行し、現代的な公共図書館システム建設に向かった。1994年にアメリカのアジア財団の支援で館内に英語資料閲覧室が開室した。1997年に国際図書館連盟（IFLA）に加入した。同年に「ウランバートル子ども図書館」がウランバートル市公共図書館の一部となり、閲覧室は市立中央図書館内に開設された。1998年にオーストラリア国際開発財団の援助で目録の電子化プロジェ

クトが開始した。この時この図書館の統合ソフトである「Alice」が導入された。1999年よりカナダの IDRC などの援助でインターネット接続が可能となった。1999年より法律資料室が開室した。2000年に図書館のウェブサイトが開設された。同年に市の周辺に住んでいる住民のための自動車図書館サービスが開始された。2004年にウランバートルのアメリカ大使館によって館内に「アメリカ文化情報センター」が開室された。2005年にモンゴル盲人協会と共同でアジア開発銀行の一プロジェクトとして視覚障害者のための録音図書センターが開室した。2007年に夜間閲覧室が開室した。2008年に資料の開架サービスを開始した。

(2) ミッション

「首都の住民に図書館サービスと書誌サービスを提供すること。そしてすべての人の自己啓発と発達を進めるため教育、文化、情報、知識、娯楽などのサービスにおいて増大する要求に合致するように努める」(パンフレットによる)

(3) 業務

① 収集

図書、定期刊行物、その他の資料を収集。出版社、印刷所、書店などからの購入、図書交換、寄贈などにより収集。年間の購入予算は3千万トゥグリク。

② 目録

カード目録とオンライン目録を併用。1998年より「Alice」を使用、これは USMARK ホーマット、Z39.50プロトコル、ISBN13標準の仕様である。分類は、BBK を使用。

③ コレクション

2006年現在45万冊所蔵している、図書、雑誌、経典、視覚障害者用資料、地図、視聴覚資料。蔵書の50%はオンラインカタログとなっている。

④ サービス

6歳以上の市民を対象にしている。年間29万人の利用があり、このうち約

7万4千人が貸し出しを受けている。席数は850席ある。図書、雑誌、その他の資料を63万冊所蔵している。このうち貴重書と一部図書がデジタル化されている。一般閲覧室の開室時間は、月、金、土、日曜日が午前10時から午後8時まで、火、水、木曜日が午前9時から午後9時までである。

⑤開架資料サービス

開架資料の管理はブックディテクション・システムで維持されている。

⑥資料の図書館相互貸借

分館と他の登録した図書館間で相互貸借を行っている。

⑦レファレンス・情報サービス

口頭、文書、電話、email / webにより印刷資料、電子資料を駆使して参考調査サービスを提供している。

⑧録音図書センター

現在の蔵書は、録音図書700点（181タイトル）、点字図書710点（115タイトル）、大型本34点（30タイトル）である。モンゴルの約6千人の視覚障害者に提供されている。

⑨夜間読書室サービス

席数70で、夜8時から朝8時まで毎日開室している。インターネットも利用できる。

おわりに

短時間の見学であったが、これら3館に共通して言えることは、市場経済下で苦闘する姿であった。国、自治体財政の逼迫により予算配分がきわめて少ないことが最大の問題となっていた。統制された出版流通体制から脱して個人、団体が自由に出版できるようにはなったが、全国的な出版流通体制がいまだ確立していないことも収集の面の困難さを生んでいるようであった。納本制度などの法的整備もまだ未着手であった。司書養成も大きな問題となっていた。あらゆる点で自前の努力が要請されているのが現在のモンゴルの図書館であった。

しかしこれら3館に限って見ると、困難な状況にもかかわらず多くの新規

事業を展開していることは大いに敬意を表したいことであつた。1990年代以降、政府の援助があまり期待できない状況で、電算化導入、蔵書構築の拡充、閲覧施設の改善などすべて自前の努力による成果が現われていた。これらの努力は、国内外の支援団体を見つけ、協力を得ることによって実現に結びつけることであつた。特に電算システムの導入、デジタル化事業にはなみなみなならぬ努力がはらわれているのが理解できた。もちろん先進諸国の図書館などの水準に比べればまだまだこれからといえようが今後の大いなる発展も期待できる。保存・修復事業などは現在は全国的には着手されたばかりの段階と言えよう。児童サービスはかなり力を入れられていたが、障害者サービスはやっと始まったところであつた。

ともあれ厳しい経営環境の中で、出会ったモンゴルの図書館員達の意欲と前向きな姿勢には教えられるものが多くあつた。それは自国の典籍への誇りと、それを後世によりよく伝えていくために今の自分たちの図書館活動があるという前向きな姿勢であつた。今後のモンゴル図書館界の発展は期待できると思った。

見学を終えた今思うのは、日本とモンゴルの図書館間の交流についてである。モンゴルは日本とドイツに対してたいへん親近感をもっている国だ。にもかかわらず両国の図書館交流が乏しいのは残念なことである。今後のモンゴルと日本の図書館と図書館員の積極的な交流の発展を心から望むものである。

注

(1) ナイダン・ツァガーチ「モンゴルの書籍と図書館」『国立国会図書館月報』420号、1996年3月

(2) 1995年以前の論文、記事として次のものがある。

西宮能敬「モンゴル行—モンゴル人民共和国国立中央図書館創立70周年記念式典に参加して」『国立国会図書館月報』371号、1992年2月

西宮能敬「70周年を迎えたモンゴル国立中央図書館」『びぶろす』43巻6号、1992年6月

ナイダン・ツァガーチ「モンゴルの児童書と児童図書館」『びぶろす』

46巻11号、1995年11月

- (3) 中村真咲「(フィールドノート) モンゴル国の図書館について」『News letter』(近現代東北アジア地域史研究会) 15号、2003年12月

林明日香「モンゴル国立中央図書館について」『アジア情報室通報』2巻3号、2009年4月

- (4) 『アジア・オセアニアでは今一変わりゆく情報環境と図書館』(第16回アジア・オセアニア地域国立図書館長会議(CDNLAO)公開セミナー記録集) 国立国会図書館、2009

(うじごう つよし。同志社大学社会学部教授)